



『^て手を^う打てば ^{うお}魚は^{あつ}集まる ^{とり}鳥逃げる
^げ下女は^{じよ}茶を^{ちゃ}汲む ^{さう}猿沢の^{さわ}池^{いけ}』

奈良興福寺の五重塔と柳の翠を映し出す猿沢の池のほとりで、ポンポンと手を打ったなら、池の鯉たちは餌の麩でももらえるのかと寄ってきますし、鳥たちは危険を察知してか急いで飛び立ちます。また茶店の女中さんはお客さんが来たと思い、お茶を汲んで「お越しやす」と出迎えてくれます。“手を打つ”という一つの行為でも、魚・鳥・人それぞれに受け止め方が異なります。これらは過去の経験から習得されたものではありませんが、立場によって物事の捉え方が千差万別であるという白隠禅師からの警告なのです。またインドには「衆盲象を撫ず（しゅもう象をなず）」という有名なお話もあります。

ある王様が盲人たちに象を触らせてあげました。初めて象に接した彼らに王様は感想を訊ねたのですが、耳を触った者は「象は団扇みたいな生きものだ」と言い、足に触れた者は「柱のようだ」、尻尾を触った者は「ほうきみたいだ」、胴体に触れた者は「壁じゃん」…とそれぞれが主張し合って大ゲンカになってしまいました、という逸話です。

これは目が見える見えないのお話ではなく、心の眼が俯瞰的（ふかんてき）に活開しているかどうかのお話で、独りよがりの思い込みに執着をする危険を示しています。と同時に、この世の事象はそれ自体に実態があるのではなく、幻想が作り出しているものでもあるのだよとも教えています。言い換えれば鯉も、鳥も、下女も、団扇も、柱

も、ほうきも壁もみんなその通りでどれもOKであって、とらわれない柔軟な心こそが大切なのだよ…と。